



Ruth RICHARDSON,
Dickens and Workhouse:
Oliver Twist and the London Poor
(xix+370 頁, Oxford University Press, 2012年2月)
ISBN: 9780199645886

(評) 閑田朋子
Tomoko KANDA

いわゆる専門書を期待して Ruth Richardson の *Dickens and Workhouse: Oliver Twist and the London Poor* を注文した方は、本書を手にとってやや意外に思われるかもしれない。カバー紙には、クリーム色の地に彩色された George Cruikshank の挿絵が載せられている。Oliver が “Please, sir, I want some more” と言う、あの有名な場面の挿絵である。本を開けばところどころに、この挿絵の登場人物の顔——人、多くても二人、例外として背中を向けて皿を持ち上げている少年の腰から上——が、まるく小さく切り抜かれてアイコンのように配置されている。無意味とも思われる装飾だが、それだけに目を引く。そしてこの挿絵を一つの全体として見慣れている私たちは驚かすにはいられない。救貧院の少年たちの一人一人の顔がこうまで異様であったかと。この挿絵の細部のように見ているようで見ていない、知っているようで知らない史的事実を、Richardson は光を当てる。Richardson 自身が序文で、次のように述べている。

You'd think . . . after countless biographies and articles, there was nothing to be known about Charles Dickens. But it turns out that fresh discoveries about him can indeed still be made. (3)

「*Oliver Twist* の救貧院、見つかる」というニュースに世界中の Dickensian がわいたのは、まだ記憶に新しい 2011 年初めのことだ。それまで長い間 *Oliver Twist* の救貧院のモデルはどこにあるのかいろいろの説が取り交わされてきた。Kettering だ、Spalding だ、いや London 北側の別の町だ、云々。もちろんフィクションにおける救貧院が、報告書のそれのように、ある特定の救貧院を現実に即して記述しているとは言い難い。それでも今回同定された救貧院の場所は、Dickens が大体 3 歳から 5 歳までと 17 歳から 20 歳まで住んでいた家 (No. 10

Norfolk Street, 現在の Cleveland Street で場所は Telecom Tower のそば) の目と鼻の先であり、正確にはわずかに9軒先だから、これは決定的だ。発見者はご存じのように、本書の著者 Richardson である。彼女の本来の専門は医療史で、死体盗人の歴史を描いた *Death, Dissection and the Destitute* (London: Routledge, 1987) をご記憶の方もいらっしゃるかもしれない。

本書は Dickens 生誕 200 周年当日である 2012 年 2 月 7 日に出版を間に合わせようとフル回転で仕上げられたそうだが、この発端は遡って 2010 年 10 月に、Richardson がこの救貧院を史的建築物として保全するキャンペーンに招かれたのが始まりだ。この建物は、旧救貧法のもとで 18 世紀後半に建てられたもので、当時は上空から見ると H の形をしていた。様々な増築を経たのち、2005 年までは病院の外来患者診療所になっていた。2007 年に English Heritage がこの建物の保全を上申したが、Frank Dobson (当地議員) と Margaret Hodge (当時の文化大臣) はこれを却下し、建物は取り壊しの危機に直面していた。Richardson は、1989 年に Bankside にある Rose Theare の保全を訴えてこれを成功裏に終わらせた立役者であった。さらに彼女は、この救貧院を 1873 年に診療所に変えた Joseph Rogers についての研究を、*British Medical Journal* (1989) に発表していた。だから彼女に白羽の矢が立ったことも頷ける。

Richardson がキャンペーンに参加することを決めて、救貧院およびその境界の歴史を調べ始めたところから本書の物語が幕開けする。医療史が専門とはいえ、もともと Richardson の研究には、Dickens との接点があった。彼女の研究対象であった Joseph Rogers は、救貧院改革運動団体を率いていたのだが、これを Dickens が支持していたのだ。Rogers は 1856 年からこの救貧院で医師として働いていた。それで Richardson は考える—では Dickens はこの救貧院をいつの時点から知っていたのだろうか—と。Dickens の子供時代のロンドンの体験と言えば、誰もが靴墨工場の体験を思い浮かべる。そこで工場と救貧院の位置関係を知らうと Richardson は靴墨工場があった場所に足を運ぶ。すると次の疑問がわいてくる—靴墨工場で働いている間、Dickens はどこに住んでいたのだろうか—。調べるうちに、彼女のノートに 17 カ所の住所が書きとめられた。Dickens が 22 歳で独立するまでに、一家がロンドンに住んでいた場所だ。そのなかに一カ所だけ、一度は引っ越したもののもどってきた住所が Richardson の目を引く。10 Norfolk Street, Middlesex Hospital. Middlesex Hospital と言えば、まさにキャンペーンで守ろうとしている救貧院のすぐそばだ。Richardson の胸が躍る。当時の地図で、これを確認した時、彼女はキャンペーンの勝利を確認する。

本書にはあちこちに詳細な注がついていて出典が明記されているが、内容はまるで推理小説のようだ。主人公は語り手にして著者である Richardson である。

救貧院取り壊しの脅威というタイム・リミットの中で、彼女は一つまた一つと疑問を解決して、Dickens一家がロンドンに移り住んだ1815年から*Oliver Twist*が出版された1838年の間のDickensの人生の空白部分を埋めていく。そして探偵が犯人を追ううちに事件の全貌が立ち現れるように、彼女が地道に調査を続けるうちに、Norfolk Street 界隈の当時の貧困層の人々の生活が徐々に浮かび上がってくる。

第一章のタイトル“Discovery: Threat, Puzzle, Silences”は、そのままこの章の内容を反映している。“Threat”は取り壊しの脅威で、“Puzzle”はなぜDickensのNorfolk Streetの家に銘板プラークがついていないのかという素朴な謎だ(6)。English Heritageのプラークは、オリジナルの建物にしかつけられない(7)。だからもともとこの建物が取り壊されていれば、公式なプラークの対象にはならない。だがNorfolk Streetに足を運んで、Richardsonは知る。“Remarkably, the old house is still standing”(25)という事実を。そこで彼女は、“an urban legend”(11)に思い当たる。たとえば“Camden Dickens Walk”というホームページには、“48 Doughty Street is the only surviving one of Dickens’s main London homes”(qtd. in 11, 現在はこの記述はない)とあった。Doughty Streetの家は、もちろん現Dickens Museumだ。Norfolk Streetの家の存在は、なぜここまで埋もれてしまったのか。

Richardsonはこの“Puzzle”を“Silences”に起因するのではないかと考える。John ForsterのDickensの伝記は、Norfolk Streetの家に一度しか言及していない。家族がMarshalsea 債務者監獄で暮らしていた間の靴墨工場の体験トラウマについて、Dickensは押し黙っていた。だとすればこれもまた、その時に受けた精神的外傷が原因なのだろうか。それともことはもっと社会的なもので、この地域とDickensとのつながりのなかに、何か原因があったのか。もしDickensが後世の自身の伝記を意識して沈黙したのであれば“Dickens succeeded for nearly 150 years”(12)と彼女はうそぶく。そしてRichardsonは、まるでTulkinghornがLady Dedlockの秘密に迫るように、Dickensの秘密に肉薄していく。

目を離せないのは、Richardsonの探偵ぶりだ。地元の研究者の強みで土地観がある。この強みを十全に生かして、彼女は健脚で名高かったDickensさながらに現場に足を運ぶ。その上で細心の注意を払って、既存の文献を読みこんで、私たちには目の前にあっても見えていなかった事実を詳らかにしていく。例を挙げよう。*Household Words*は“Dickens Journals on Line”(http://www.djo.org.uk/)のおかげで、今では簡単に閲覧できる文献だ。その第19巻(1859)に“New Year’s Day”という記事がある。幼いDickensがある婦人に連れられてSohoの市に行った新年の思い出をつづったものだ。そこには次のような記述がある。

A distinct impression yet lingers in my soul that a . . . personage of the female gender . . . wearing a pocket in which something clinked at my ear as we went along, conducted me . . . to the World of Toys. (Qtd. in 33)

Nearly lifted off my legs by this adamantine woman's grasp of my glove. . . I was halted through the Bazaar [in Soho Square]. . . (Qtd. in 33)

これを読んで、Richardson は考える。この女性は Soho Square のすぐそばに住んでいた Dickens の父方の祖母だろう。Soho の市場は、Norfolk Street からそれほど遠くない。耳の位置にこの女性のポケットがあったということ、手を強く引かれて足が宙に浮きそうだったことから、このころの Dickens の大体の背丈が分かる。この背の高さであれば、Norfolk Street に住んでいた3歳から5歳の頃の思い出と考えるとよかろう、と。

さらに Richardson はこの記事から、当時の Dickens はかなり恵まれた少年だったと結論づける。市場で半クラウンもするおもちゃを買ってもらえる上に、家に帰れば揺り木馬があるし、牛肉入りのパイもある。これではあまりにつらくみじめな記憶だから封印したという仮説は成り立ちそうにない。そこで Richardson は自らにたずねる。

So where did Dickens's empathy with the plight of the bereft orphan workhouse boy come from? Might he have witnessed or overheard something at the early age, which made him ponder his own fortunate position, the blighted possibilities of poorer lives, experiences more bitter than his own? (36)

第2章から第5章までは、1815年から17年の間に幼い Dickens が見たであろうものを追っていく。章の運びは映画を見ているかのようだ。まず第2章で Richardson のカメラアイは、さまざまな階級の人々がモザイク状に住み分けていたロンドンを俯瞰する。第3章で Norfolk Street 周辺にカメラを近づけて病院と救貧院という二大施設を映し、第4章で Dickens の家の外観を見せてからカメラアイは家の中に入り込む。そして第5章で上階の窓から通りを見下ろして、幼い Dickens がそこに見たであろうものを読者に示す。3-5歳では普通は記憶もおぼろだろうが、これは Dickens には当てはまらない。Dickens の幼少時の記憶の鮮明さは、家族を驚かせたほどだから、忘却ゆえに Norfolk Street の家について沈黙したわけではなからう。

第2章のタイトル “Vicinity: Environs of Gentility, Environs of Poverty” も、内容

をストレートに反映している。“Environs of Poverty”から話をすれば、このころの St. Giles 周辺は貧困層が住む物騒な地域だった。だから幼い Dickens も St. Giles の辺りには連れて行かれなかっただろう。ナポレオン戦争 (1815 年終結) で負傷し身体を失った兵士たちが、通りで職を求め物乞いをしていた。悪天候のためのヨーロッパ全域の不作と、穀物法のために、食料品の値段が上がった。アイルランド飢饉が起ると、ロンドンに移民が押し寄せた。その一方で Dickens の家から、ほんの数分歩いたところには、きわめて富裕な人々が住む地域があった。救貧院があるくらいだから Norfolk Street はお上品な場所とは言い難いが、のちに速記者になった Dickens が名刺にこの住所を明記しているように、あえて隠さなければならぬほどひどい場所でもなかった。“Gentility”と“Poverty”の境界で、“Gentleman” (51) を気取りながら救貧院のそばに住む父のもとで、幼い Dickens は何を見たのか。Richardson の推測は続く。

第三章 “Institutions” の前半は近所の Middlesex Hospital を、後半は問題の救貧院を取り上げている。Richardson は幼い Dickens が見たであろう、病院の外のにぎわいを再現する。門の傍らには赤ら顔のバラッド売りの女性が立っていて、前面の壁の前にひもを張って売り物のシートをつるしていた (バラッド収集家 Sarah Banks がこの女性の常連客だったので、残っていた記録だ)。通行人のざわめき。病院を訪れるたくさんの人々—看護婦、医者、学生、事務員、病院の清掃員などなど—。お偉方を乗せた一頭立て二輪馬車、患者を運ぶ担架や手押し一輪車。病院に食糧を運搬する荷馬車。人が集まる場所にはさらに人が集まる。行商人に物乞い、果物売りに花売りがやってくる。

では、救貧院は幼い Dickens の目にどう映ったのだろうか。建物の入口では破風の老人の彫刻が、“AVOID IDLENESS AND IMTEMPERANCE” という標語を掲げている。救貧院のたくさんの窓が通りに面していたから、窓越しに中の人々の顔が見えたかもしれない。分娩室と精神病患者のための病棟は建物の前面に位置したから、うめき声や泣き叫ぶ声が外からでも聞こえただろう。起床・労働・食事・終身などの時間を知らせる救貧院のベルは、近隣に鳴り響いた。強烈な悪臭と息詰まるような埃が、救貧院から漂ってくる。

第四章 “Home” で、Richardson のカメラアイは、10 Norfolk Street の家をまず外から眺める。通りの角にある地下室付きの 4 階建てで、1 階はチーズ屋兼食料品店でチャップブックも商っていた。家主は店の経営者である John Dodd だ。1824 年に父親の John Dickens が債務者監獄に入った時、彼は債権者の一人だった。ということは家賃が滞っていたのだ。それにもかかわらず、1829 年から再入居を許しているから Dodd は寛大だ。彼は単なる大家ではなく Dickens 一家の友人でもあったのだろう。この章で特に興味をそそるのは、家の中の様子の描写

だ。Richardson はここで“Schedule”と銘打つ 1804 年の史料を持ち出してくる。これはこの家の設備・調度の査定リストだ。Richardson はこのリストと己が目で見た内装を突き合わせて、この家が救貧院のそばというロケーションからは考えられないくらい、ゆったりとして住み心地の良い家であったことを私たちに知らせる。

第 5 章“Street”で Richardson は、Norfolk Street とこれに交差する通りの様子を再現する。質屋はどこで、パブはどこか。どのような外観の家がどこに建っていたのか。幼い Dickens は、今まさに救貧院に入ろうという家族が、とぼとぼ Norfolk Street を歩いているのを見たかもしれないし、救貧院に関するうわさ話を耳にしたらどう。

第 6 章“Calamity”で 1817 年に Norfolk Street の家を出てからの Dickens 一家の生活を概観した後、第 7 章“*Young Dickens*”は 1829 年にこの家に戻ってきた Dickens に焦点を当てる。Dickens は今や 17 歳だ。かつて同じ家に住んでいたところと同じもの一例例えば Norfolk Street を行く貧しい人々の葬儀の列一を見ても、その見方は違っていただろう。医者に売る解剖用の人体を得ようと、エディンバラで 16 人もの人々を殺した Burke と Hare が、ロンドンでも同じことをしていたと分かったのが 1831 年だ。被害者のイタリア人の少年は、芸をする白いハツカネズミを見せて、日々の糧を得ていた。この少年の死体は、最終的には、10 Norfolk Street の家の前を通って、救貧院の裏の貧民埋葬地に埋葬された。成長した Dickens は、こういった貧しさが生んだ悲劇を、何を思っただけ見聞きしたのだろうか。

Dickensian ならばこうして章を読み進めるうちに、Norfolk Street に住む Dickens が見聞きしたであろうものと良く似たイメージを思い出さずにはいられないだろう。要所で Richardson 自身が、Dickens の著作から類似したシーンを抜粋していく。最初は単なる偶然だろうと思っても、これが積み重なれば、凄みを帯びて説得力も増す。そして第 8 章“*Workhouse*”から第 9 章“*Works*”にかけて、問題の救貧院がどのように Dickens の作品、特に *Oliver Twist* に、反映されているのかという一点に向けて、本書は収束していく。ここでも例をあげよう。*Oliver Twist* の時代設定は新救貧法導入 (1834) 以前だが、それにもかかわらず、*Oliver Twist* は同法に対する鋭い批判になっている。これについては、Dickens が混乱したのだらうという意見もある。だが、Norfolk Street の救貧院が位置した地域では、旧救貧院法から新救貧法への実質的な移行は二段階に分けられていた。そして第一段階の移行は、1830 年から 1831 年にかけて、つまり Dickens がまだ Norfolk Street に住んでいた時点で行われたのだ。しかもこの移行に関する教区会の『報告書』は、*Oliver Twist* の最初の数章を連想させずにはい

られないものだった。別の例をあげれば、*Oliver Twist* の中に登場する固有名詞には、Norfolk Street 界隈の地名・人名に関連したものが多い。救貧院の向かいの油類を商っていた男の名は Sikes と一文字違いの William Sykes だった (273)。

推理小説の結末をあらかじめ述べるほど野暮はない。本書は推理小説のようであるにすぎないが、それでも最終章 “The Most Famous Workhouse in the World” については言葉を控えて、Richardson の文章をそこから一行だけ引用する。

The street and its vicinity held [Dickens's] life in a grasp. . . (277)

Dickens の生涯についてもっと良く知ろうと本書を手にとった方は、Norfolk Street 界隈の地理や歴史の説明が詳細にすぎると思われるかもしれない。だが、歴史家 Richardson が事実と想像力の糸を絶妙に組み合わせて、*Dickens and the Workhouse* というテキストを織り上げていく様は圧巻だ。読了後に納得がいかない点が残ったとしても、この本を手には、ロンドンを歩こうという気持ちになることだけは請け合いたい。最後に、Dickensian であれば周知の事実であるが、救貧院保全のキャンペーンは成功のうちに終わったことを、付記しておく。